

聖書日課 『からし種』 2023.3.5-3.12

<p>3月5日 (日) 士師記 13章</p>	<p>「そこでマノアは、主に向かってこう祈った。『わたしの主よ。お願いいたします。お遣わしになった神の人をもう一度わたしたちのところに來させ、生まれて來る子をどうすればよいのか教えてください』」(8節)。妻が知らせた主の御使いの話を疑うことなく、使命をともに担えるように祈る夫マノア。互いに信頼し、励まし合う二人の間にサムソンは生まれた。</p>
<p>6日 (月) 士師記 14章</p>	<p>「彼は、女のところに下って行って言葉をかけた。サムソンは彼女が好きであった」(7節)。「好きだから結婚したい!」という若いサムソンの無邪気な恋の相手はペリシテ人の娘。主が求めておられたペリシテ人への手がかり(4節)は、もしかすると「平和の手がかり」になったかも知れない。しかし、民族・宗教・プライドなどの対立で、悲惨な終わりを見てしまう。</p>
<p>7日 (火) 士師記 15章</p>	<p>「彼(サムソン)は非常に喉が渴いていたので、主に祈って言った」(18節)。サムソンの生涯で「主に祈った」と記されているのは、喉が渴いて死にそうになったこの箇所と、ペリシテ人に捕えられ見せ物にされた箇所(16:28)。得意の絶頂からピンチに陥り、弱くされる時は、主が祈りの機会をくださっているのだろう。「祈る者の泉(19節)」がいつも心にあるように。</p>
<p>8日 (水) 士師記 16章</p>	<p>「わたしは母の胎内にいたときからナジル人として神にささげられているので、頭にかみそりを当てたことがない。もし髪の毛をそられたら...」(17節)。力の源は「髪」より「神」でしょ!と仰いたくなるサムソンの思い違い。主こそがサムソンを強くしてくださっていることを知れば、デリラもサムソンを陥れる計画から離れて、二人で生きる道を見出せたかも知れない。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.3.5-3.12

<p>9日 (木)</p> <p>士師記 17章</p>	<p>「レビ人がわたしの祭司になったのだから、今や主がわたしを幸せにしてくださることが分かった」(13節)。ミカという男、滑稽なほどの勝手なふるまいの中でも、「幸せ」を求めているらしきこの言葉が悲しく響く。「それぞれが自分の目に正しいとすること」(6節)を行いながらも、何を信じて頼ればいいのかわからない、迷える時代は現代にも似ている。</p>
<p>10日 (金)</p> <p>士師記 18章</p>	<p>「その地には人をさげすんで権力を握る者は全くなく、シドン人からも遠く離れ、またどの人間とも交渉がなかった」(7節)。「静かで穏やかな」異国人の町ライシュを征服したのは、偶像と怪しい祭司を掲げた暴虐な「イスラエルの子」ダンの人々。士師記の記者はむしろ悲しんでいるような書き方をする。「しかし、この町の元来の名はライシュであった(29節)」</p>
<p>11日 (土)</p> <p>士師記 19章</p>	<p>「若者は主人に、『あのエブス人の町に向かい、そこに泊まることにしてはいかがですか』と言った」(11節)。異国人であるエブス人の町に泊まることに、若者は特に抵抗を感じていないようだ。諸国の人々と共に育ってきたからだろう。それを嫌がった主人は、「イスラエルの人々」の町ギブアで、愛していたはずの女をあまりにも残酷な暴力の犠牲にしてしまう。</p>
<p>12日 (日)</p> <p>士師記 20章</p>	<p>「イスラエルの人々は主の御前に上って、夕方まで泣き続け、主に問うて言った。『兄弟ベニヤミンと、再び戦いを交えねばなりませんか』」(23節)。ベニヤミンの「非道」を裁くために立ち上がったイスラエル。しかし兄弟同士で殺し合うことほど空しく哀しいことはない。兄弟同士であっても、「共に」生きるために、私たちは和解の主を必要とすることを覚えたい。</p>